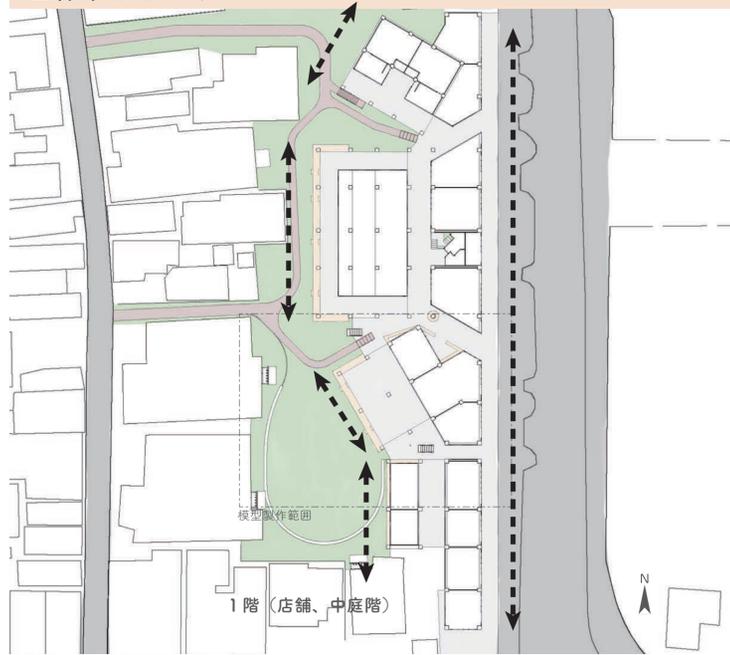


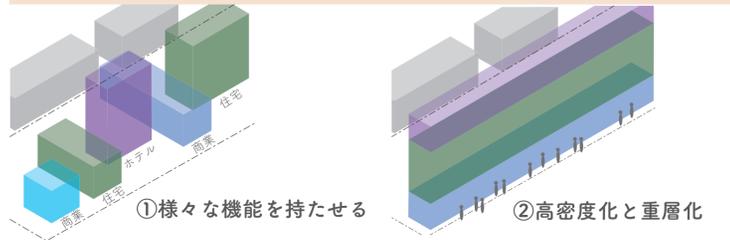
次代の京都市の暮らしの手引き



全体平面図 1/500

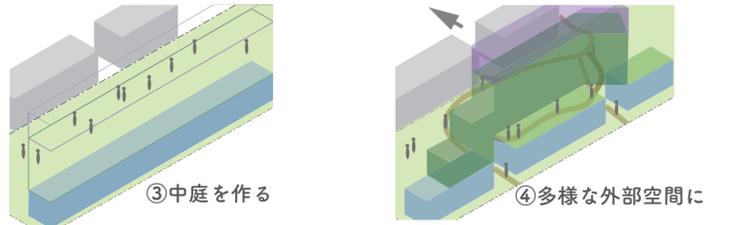


全体構成ダイアグラム



①様々な機能を持たせる
まちにある様々な機能を同時存在させることで街区全体の豊かさや強靱性、多角的な収入をつくる。

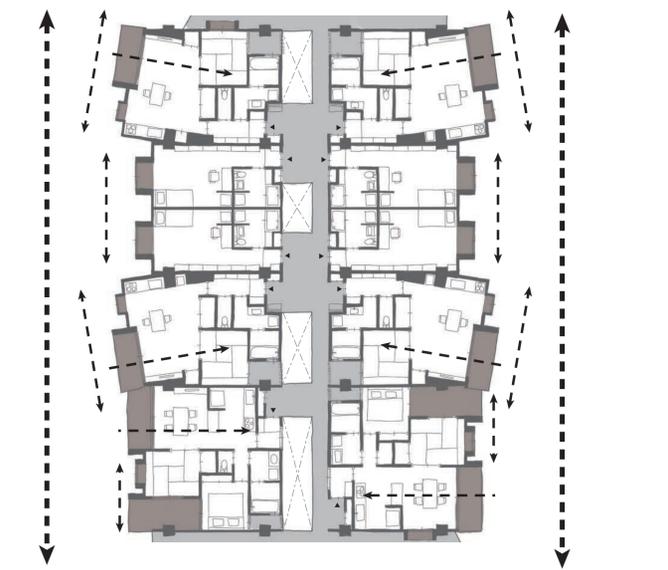
②高密度化と重層化
機能を重層させることでまちの機能を適切な位置に配置できる。接地性の高い1階に店舗、中層に住宅、最上階にホテルを配置した。



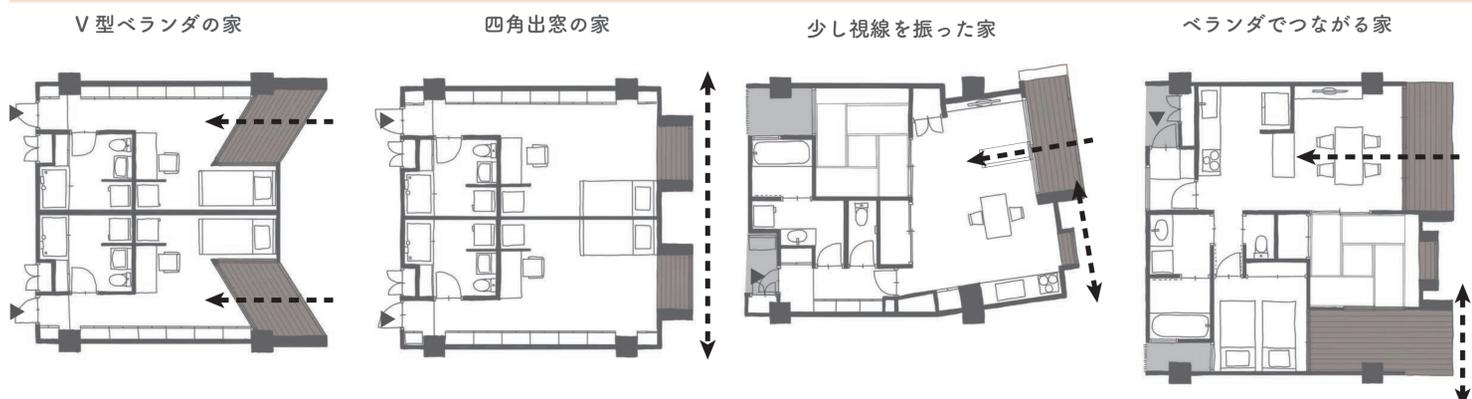
③中庭を作る
街区中央に中庭を作ることで敷地周辺にも豊かさをもたらす。子どもたちに安全な遊び場を、住民にはグリーンインフラを提供する。

④多様な外部空間に
全体ボリュームを折り曲げ多様な外部空間を作る。多様な空間が多様なふるまいを引き出し、街区全体に本質的な豊かさをもたらす。

部分平面図 1/200



各住戸平面図 1/100



隣人の様子を少し伺うことができるように、ベランダをV字に内側へ向かわせた家。ベランダでの活動がそのまま隣人と共有されるため、そこから関係を築きやすい。

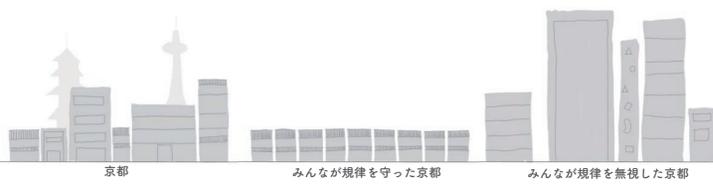
ベランダの代わりに一畳ほどの広さの出窓を設けた家。床レベルから400mm上がっているため、椅子としても利用できる。隣人に活動がみられることはないため、自分だけの世界を表現できる。

リビングからベランダにかけてグリッドより少し角度をつけ、視線を振った家。視線は清水寺、智積院、愛宕山、京都タワーのいずれかに向くように設計されており、他の家とは違った視線から活動が生まれてくる。

主に子連れ家族の入居を想定した家。物干しなどに使う通常のベランダに加えて、子どもが安全に遊ぶ奥行きのあるベランダを設けた。この広いベランダはリビングから和室、寝室までをつなぐ役目も果たしており、部屋の機能を限定しない使い方から暮らしが現れる。

京都の暮らしの豊かさとは

京都の本質的な豊かさは、暮らしの多様性にある。現在その京都の豊かさは岐路に立っている。京町家は次々と取り壊され、画一的な建築へと置き換わっている。一方で景観条例や補助金などの政策によって開発を抑制し、外見だけでも京都らしさを保とうとしている。しかし、どちらの方法も京都の本質的な豊かさを捉えてはいない。暮らしの多様性こそが現代の京都の持つ本質的な価値であり、人々がここで共に暮らす理由なのではないだろうか。そこで私は、京都に根ざした豊かさと多様な暮らし方がある集合住宅を提案する。しかし「多様なまま」をそのまま空間設計に持ち込めば、逆に暮らし方に制約を与えかねない。さらに、過度なコストや複雑すぎるプログラムは、市民が使いこなせず、多様な暮らしを受け入れられなくなる。そこで「すでにあるものを組み合わせる」ことで多様性を映す額縁のような建築とした。京都の人々は、大きすぎる街区をうまく活用しながら暮らしを築き、効率的な木割によって家建ててきた。現代においては、ゼネコンによる画一的な建築さえも受け入れてきた。こうした要素を組み合わせ、さらに少しの工夫を加えることで、次なる京都の多様で豊かな暮らし方を目指した。



敷地

敷地は京都市東山区、京都国立博物館に隣接した住宅地である。洛中の伝統的なグリッド街区の秩序を引き継ぎながらも徐々に崩れ始めており、そのおおろかさがまちの印象を形作っている。また、東山の斜面地に位置しており、敷地東西ではおよそ1メートルの高低差がある。このような敷地条件から、伝統的な京町家のような住宅ではなく現代的な京都の豊かさを体現する住宅がふさわしいと感じた。



敷地周辺回
敷地は南北に120メートルほど接道し、東西に傾斜がある。そこで、南北方向に多様な暮らしのふるまいをあらわす「ふるまい軸」を、東西方向に周囲の景観を暮らしに取り込むための「景観軸」を設定した。全体計画から住戸の設えに至るまで軸線による設計とし、都市のスケールから次代の京都の住宅を目指した。